

革が変えたのは、まさにこの点だったのです。

B. ストラスブールの宗教改革

プロテスタントの礼拝において、初めて詩編の歌唱を導入したのは、ストラスブールの改革派教会でした。

ストラスブールの教会は、いくつかの詩編を民衆の言葉で、すなわちドイツ語で、女性や子どもも含めた、全会衆によって歌わせようとしたのであり、これは礼拝の大いなる刷新でありました。

この極めて驚くべき革命は、この時代のドイツの都市文化が持つ、ある特徴によって説明可能です。ドイツの都市は、自分たちの町が、キリスト教都市として、ひとつの共同体である、という感覚を、非常に強く発展させました。詩編は、先ほど述べましたように、それまで司祭や修道士に固有なものに留まっていたましたが、礼拝の民主化は、実のところストラスブールの都市共同体による、聖書の祈禱文の聖職者からの奪取にはかならなかったのです。他方、この町の宗教改革者たちは、新しい礼拝が、特に聖書のテキストに基づくものであることを、求めました。このことは、歌唱のための祈禱文として、特に詩編が選ばれた理由を説明するものであり、彼らの改革を、ルターのものとは区別する、改革派的な特徴なのです。この礼拝革命は、詩編の会衆賛美に女性が加わることにより、一層人目を引くものになりました。というのは、このことは、当時のカトリックにとっては、つまづきだったからです。

C. ユグノー詩編歌の段階的形成

ここでは、その後に起こったことを述べましょう。1525年に、ストラスブールは、福音的なフランス人ユマニスト（人文主義者）たちのための、一時的な避難所になりました。高等法院（パルルマン）が宗教改革者たちを迫害したときに、これらの人文主義者たちもバリから逃れざるをえなかったのです。ストラスブールに滞在している間に、彼らは詩編が全会衆によって歌われていることを発見し、これに熱狂しました。かれらはこの現象を、王の姉である、マルグリット・ド・ナヴァールに伝えました。詩人のクレマン・マロは当時彼女の保護下にいたのですが、彼が、音楽に

合うような形での、詩編のフランス語訳に向かったのは、おそらく彼女のはたらきによるものでありました。

ジュネーヴの改革者となったカルヴァンは、1537年に（これは第一次滞在期ですが）、宗教的決定権をもつ市当局に、礼拝に詩編の歌唱を導入することを求めました。それは明らかに、ストラスブールになったものでした。それ以後、この件は次のように展開していきます。

1538年から1541年までの間、カルヴァンはジュネーヴを追われて、ストラスブールに滞在します。1539年、かれはここでフランス人教会のために、いくつかの詩編を集めた歌集を出版します。これは、クレマン・マロと彼自身の訳になるもので、メロディーがつけられていました。

1541年にジュネーヴに戻ったカルヴァンは、詩編の歌唱の礼拝への導入を想定し、翌年、改革派の典礼書を出版します。これはすぐにすべてのフランス語圏の教会の模範となりました。そこには、1539年のストラスブール期の詩編集に加え、17の新しいマロの訳がメロディーとともに納められています。

1542年、マロは、福音的確信のゆえにフランスで迫害され、ジュネーヴに逃げてきます。その時、カルヴァンはこの機会を利用して、詩編の全訳を完成させ、そのそれぞれにメロディーをつけようと決意します。このため、カルヴァンはマロに残されている詩編の韻文化を、音楽家のギヨーム・フランに作曲を依頼しようと決意します。フランについては、1543年の4月に、市当局に彼を公式に雇わせることに成功しますが、マロについては、同年10月、市当局に年金を出させることに失敗します。同年末に彼はジュネーヴを去り、まもなく死去しました。マロは49の詩編を訳したのみで、彼の仕事は未完成に終わりました。人文主義者であり、詩人でもあるテオドール・ド・ベーズが、1562年に、彼の仕事を完成させます。完成したユグノー詩編歌は、驚くべき普及を見ました。それは単にフランス語圏の改革派教会においてのみならず、ヨーロッパの他の言語の改革派教会にも拡がり、また教会のみならず個人の間にも、優れた宗教書として広まっていったのです。